

地蔵院の土地

地蔵院の入り口には安土桃山時代（1568－1603）に建てられた立派な門があり、総門と呼ばれている。寺の境内へと続く参道の両側には高さ 25 メートルまで伸びる孟宗竹が密生している。寺の建立時には存在しなかった竹林だが、今では「竹の寺」という愛称で親しまれるようになった。本堂の左側には 600 年以上前に作られたこの寺の開基の墓があり、一方右側の道は方丈と枯山水の庭園が続いている。1686 年に細川家の援助で再建された方丈は、4 つの部屋に分けられ、僧侶たちが生活したり、勉強したり、修行したりしていた。部屋の前には十六羅漢の庭と呼ばれる枯山水の庭がある。いくつかの石が庭に据えられおり、石清水八幡宮の方を見たいという思いから、羅漢を表す石は少しだけ左に傾いていると言われている。

地蔵院の住人でもっとも有名なのは一休禪師（1394－1481）である。後小松天皇（1377-1433）のご落胤として、6 歳までを母と一緒に地蔵院で過ごした。自分と天皇家とのつながりを口にするのではなく、貴族も平民も同じように接した、と言われている。